慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	「白井浩司先生と私」
Sub Title	
Author	石原, 優(Ishihara, Yutaka)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1982
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.44, (1982. 12) ,p.373- 376
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	白井浩司教授記念論文集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00440001-0373

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

した戦後第四次『三田文学』の編集時代のことだけは、省くわけにはいかない。第四次『三田文学』は昭和三十三年九月に、何人かの俊才たちによって復刊されたのだが、いかなる仕儀か、かれらが二、三号出した時点でとつぜん退陣し、そのあとをまるでその気のなかった私が引き継ぐことになったのである。どうやら仕掛人はいまは亡い山川方夫らしかった。私は大いに困却した。山川さん初め、おおぜいの先輩が後押ししてくれるとはいっても、俄かのことで、手許に原稿一本ないのである。

そんな私を励まし――励ますばかりでなく、企画や実務の面でいろいろと力を貸して下さったのが、編集委員の一人である白井先生だった。企画についていうなら、たとえば清水徹さんの評論とマルグリット・デュラスの小説「モデラート・カンタービレ」（田中倫郎さん訳）で評判になったアンチ・ロマン特集は、先生の発案になるものだし、永井荷風追悼号をいそぎ編まねばならなかったとき、村松剛さんから、中央公論社の近藤信行さんが荷風論を執筆中という、耳よりな情報を仕入れてきたのも先生であった。たしかに先生は責任感のつよい、いざとなると偉ぶらずに気軽に行動を起こす人であるけれど、この時期、作家志望の教え子がよほど頼りなく思われたにちがいない。

その頃からかぞえて二十有余年。最近は、先生とは文壇関係のパーティかなにかで顔を合わせることのほうが多い。そんなとき、グラスを手にしたほろ酔い気分の先生が、手伝いに狩り出された銀座のクラブの女性たちと上機嫌で語らっている場面によく出くわすが、卑しさのみじんもない、あのおっとり構えた、洒脱な態度物腰は、見ていてじつに気持がいい。夜の銀座においても、先生はまだまだ現役でありつづけるだろう。

（作家・昭和三十三年仏文科卒）

「白井浩司先生と私」

石原　優

いささか誇張した表現かもしれないが、一冊の本との

出会いが私の未来を変え、一人の師との邂逅が私の今日を決定した。一冊の本とはアルベール・カミュの『異邦人』であり、一人の師とは白井浩司先生である。

昭和三十年当時私はいくつかの病気を背負いこみ、気重く閉された気分で闘病生活をしていた。そうした時に、病床でたまたま手にした本が窪田啓作訳『異邦人』(新潮文庫)であった。

「きょう、ママンが死んだ。もしかすると、昨日かも知れないが、私には分らない。」

ではじまるカミュのこの書はきわめて衝撃的で、私は床に横たわったまま一息に読んだ。その時の異常な興奮と感動を、今でもまるで昨日のことのように思い起すことができる。

もし健康を回復する日があったら、この本を原書で読んでみよう——病床で心に決めたささやかな願いが、当時既に佐藤朔・白井浩司の名で知られていた慶応の仏文を私に選ばせた。この体験がなかったならば、たぶん今頃、私は医者になっていたであろう。

日吉の一年間を終って三田のオリエンテーションの時に、初めて私はこの二人の先生と対面した。その時の会話とか情景はすこぶるあいまいなのだが、佐藤教授が隣席の白井助教授に何ごとか質問されたのに対し、「はい」と応えられた声の調子だけを、やけに生々しく思い起すことができる。

以来、二十五年以上が経つか。

白井先生の講義にはいわゆる名講義というのが多かった。原書購読を通じて、いわばフランス語の手ほどきを受けたようなものであるけれど、随所に挿入される逸話余談の中にフランスの香りとか肌合いとかを感じて、イマジネーションをかきたてられた。これは大方の人々の経験であろうが、一般の名物教授として記憶される先生方の講義は、講義の内容の充実はもとより、この種の挿入余話の豊かさに魅力があるのだ。塾にはそういう教授が多かった。

白井先生の講義の中でも、「仏文学史Ⅰ」「仏文学史Ⅱ」というのは特に面白かった。テーマの選択展開に加え

て、語られる言葉そのものがユニークで楽しかった。それと大学院時代の「ロブグリエ論」は今でもノートを保存している。

塾の特色というか伝統というか、学部を越えての傾向だと思うが、弟子の方から見ると師は何年経っても師に違いないけれども、師の方からはだんだん弟子が弟か友人のように見えてくるものらしい。殊に白井先生にはこの傾向が顕著で、教壇を離れてからは弟子たちを身近くあつかってくれた。つまり、銀座・新宿・渋谷と酒場めぐりをすることで、教室を出てからの薫陶には師弟関係を超えた飾りのない人間的つきあいがあった。これは大変幸福なことで、同窓のだれもが等しく良き思い出としている。

深夜、銀座の酒場から呼びだしがかかる。（またそういう時にかぎって、翌日の白井先生の講義の準備をしていることが多かったが）とにかく迎えに行くということになる。当時私は東横線の都立大学に住んでいた。家も近かったので、かならず先生を送って帰って、酔いつぶれた。翌日、二日酔気味で講義に出ると、また奇妙に名指しであてられる。しどろもどろにやると、きまって最後に「君、準備が不足していますね。」とやられた。

昭和四十六年、学園紛争で荒廃している時である。先生からパリ行きを勧められた。画商見習のアルバイトを探してくれたのも先生であった。私は最初抵抗したけれども、佐藤朔塾長にも勧められることになって意を決し、フランスに渡った。結果的にはこれが私の今日を決定することになった。

五年経って私は、パリ高裁鑑定人でフランス鑑定人協会会長のロベール・マルタン氏を顧問に、画廊を開き今日にいたっている。

一冊の本、カミュの『異邦人』が医者になるはずの私を仏文学に近づけた。最初はただ原文でこの書を読みたいという病床の若者のささやかな願いにすぎなかったが、その選択が生涯の師との邂逅につながった。

そしてその師の勧めでフランスに渡り、今日を得た。今にして思うと、私は先生から仏文学を通してフランス

そのものを学んだように思う。それには教室の講義ばかりではなく、酒場での談論も共に必要であったのだ。

私は白井浩司先生との出会いに一種の運命を感じるし、自分を幸福者だと思っている。

運命といえば、私の仲間の鑑定人ロベール・マルタン氏の奥さんは、アルベール・カミュの正真正銘の従妹である。この見えない不思議な糸はどう繋がっているのであろうか。

（画商・三十六年仏文科卒）

白井浩司先生とわたし

岡田隆彦

幸運なことに、在学中のわたしは教室以外のところでも白井先生とお会いすることができた。それもしばしばである。というのも、一年生の頃から『三田文学』の編集を手伝ったからである。最初は雑役係すにぎなかったが、けっこう楽しかった。当時、『三田文学』編集部は、いまは亡き梅田晴夫氏のご好意で、八重州の梅田ビル地下の、「濤の会」の事務所に同居させてもらっていたが、わたしは、教室にいるよりはそこにいることが多く、ときおり、編集委員の諸先生のなかでもまとめ役だった白井先生を三田の研究室に尋ねるのが、学校に行くときだといった怠慢な学生だった。しかし、間もなく編集部が三田の仏文学科研究室に移転したため、わたしも少しはまじめに授業を受けるようになったが、そんな時期にもしばしば編集部員の一人として、白井先生からのご指示をあおぐために、学外での昼食のご相伴にあずかった。先生の昼食はたいてい香りのよい流動食であった。

学外で何ども軽妙酒脱な、あとをにごさぬといった先生の飲みっぷりに接しながら、わたしは多くを学んだが、翌日教室に出てみると、先生は冗談もいわずに淡々と「マノン・レスコー」の講読をされたりするのだった。それでも機嫌のよいときなどは、前日に先生がお会いになった小説家や芸術家についての逸話を多少シニカルな笑いをまじえてお話しになって、授業の枕をふるの